

さて、管制塔を目指すメンバー、フェイスマンとマードックの二人は、とりあえず当てずっぽうで空港内を進んでいた。管制塔の場所って、意外にわかりにくいのだ。遠くから見ればわかるのだが、どこからどう道が繋がっているかがわかりにくい構造。犯罪者と当てずっぽうで訪れる客には冷たい仕組み。

「えーと、北ウイングの、東側だよ。……東ってどっちだよ？」

大雑把に描かれた見取り図を眺めて、フェイスマンがマードックに問う。

「えーと、北向いて……右？」

「右？ 右ってどっちだよ？」

「茶碗茶碗箸の、箸の方。」

「何それ？」

「日本で言うところの。えーと、ライスボウル・ライスボウル・チャップステイクスの、チャップステイクス側。」

「わかんないって。」

そりゃわかんないだろう。わかんない以上に、なぜ茶碗が二膳あるのかも不明。

「とにかく急ごう。」

「おうさ。」

小走りでロビーを駆け抜ける二人。各航空会社のカウンターを抜け、ショッピングモールを抜け、国際線出口ロビーに続く待合室を通りすぎる際、いきなりフェイスマンの足が止まった。一点を凝視して固まっている。

「痛てっ、ちょっと、何で急に止まんよ。」

フェイスマンの背中にぶつかつたマードックが不平を述べた。フェイスマンは、待合室の一点を見つめて動かない。

「ごめん……俺、仕事やり残してたかもしれないわ。モンキー、ちょっと待っていてくれる？」

「仕事？」

「ああ。」

そう言って、顎をしゃくって一点を指し示すフェイスマン。その先にいたのは、旅行鞆を抱えた一人の日本女性。

『もしかして、ドワーニ君の行き先がバレた？』

悪い予感を噛み締めながら、フェイスマンはハナコ・ヤマダに向かって歩を進めた。

「ミス・ヤマダ！」

呼ばれて顔を上げたハナコさんが見たものは、先ほどレストランで鬱陶しかった男が、さらに鬱陶しく手を振りながら駆け寄ってくる姿。当然、無視。

「ああ、やっぱり君だった。キモノ姿じゃないから、危うく見すごすところだったよ。そういう格好も似合ってるね。」

待合室のベンチに座るハナコの前に到着するや否や、フェイスマンは言った。因みにこの台詞、彼の脳から出たものではない。恐らく脊髓反射だろう。あの、熱いものに触ると咄嗟に手を引っ込めるやつ。

「ありがとう。」

ジーンズにTシャツとサンダルという軽装のハナコが、これもまた脊髓反射で答える。無視してやる、という意思とは関係なく。

「ええと、そんな荷物持って、どこへ？」

「どこだっていいでしょ。」

脳から発せられた会話、終了。一瞬の静寂が。

「……まさか、ドワーニ君のどこへ行くんじや……？」

「あなた、ドワーニ君がどこへ行ったか知ってるの？」

「やっとなナコが顔を上げた。」

「い、いや、知らないけど、彼、旅行に行つたって聞いたから、その、君が彼を追いかけようとしてるんじやないかと思つて……。」

「本当に知らないの？ 隠してるんじゃない？」

最早、話題の焦点は「ハナコがどこへ行くのか」ではなく「フェイスマンがドワーニ君の行き先を知っているかどうか」にすり変わっていた。実のところ、ハナコは日本に一時帰国しようとしていただけなんだが。

「ホント、彼がどこに行つたか、俺も知らないんだよ。知つたら教えるって。」

「教えるはずないけどな。」

「じゃあ、彼に、他に何で言われたの？ すべて話さない。その中から私が手がかりを探すわ。」

「え、でも、直接話をしたわけじゃなくて……彼には会つたこともないし……。」

「嘘おっしやい！ 会つたこともないのに、なぜあなたが彼の代わりに私に会いに来たのよ。」

「そ、それは、そうしろつて頼まれて……その……。」

ストーリー捏造中のフェイスマン。

「そう、ええとね、ドワーニ君が急に仕事で旅行に行かなきゃならなくなつたんで、君との約束を延期してもらおうと思つただけで、どうやっても君と連絡が取れなくて、友達に伝言を頼んだわけさ。でも、その友達つてのがまたちやうど都合悪くなつちゃつて、友達知り合

いに頼んで、知り合いの親戚に頼んで……つて回り回つて俺のところに来た、ということだ。」

ハナコは細く形のいい眉を顰めていたが、その後、少し嬉しそうな表情に変えた。

「延期、なのね。彼が帰ってくるまで、待つていれればいいのね。」

待たれては困るんだが。ハナコに待たれていては、ドワーニ君はLAに帰つてこれなくなる。

「あ、そう言えよ。」

フェイスマンはわざとらしく指をパチンと鳴らした。

「彼からの伝言、まだあつたよ。何だつたっけかな……。」

『仕事が長引くかもしれない。君に寂しい思いはさせられない。もし、いい人と出会つたなら、僕のこととは忘れてくれ』とか何とか。

「まあ、ドワーニ……優しい人……。でも私、あの人のことを忘れるなんて無理です。それに、あの人と出会つてしまった私には、あの人以上の『いい人』なんて……。」

「おーい、フェイス！ やっぱ管制塔、どうやって行つたらいいか、わかんねえわ。」

周りの空気を読めないマードックが、小走りでやつてきた。

ズキーン！

フェイスマンの斜め下で、妙な音が聞こえたような気がした。

「……優男。」

「はい？」

そう呼ばれて返事してしまうフェイスマンもフェイスマンである。

「あの人は誰？ あなたの知り合いでしょ？」

「ん？ あいつはモンキー。知り合いつて言うか、あんまり知らないつて言うか、知りたくないつて言うか。」  
「ステキな方ね……。」

「……え？ ええっ？」

ハナコは鞆を投げ捨てつつ立ち上がると、マードックに向かつて深々とおじぎをした。もう彼女の目はマードックしか見ていない。

それを見たマードックも、ハナコの前に来ると、深々とおじぎをした。

「それじゃ、ミス・ヤマダ、ドゥーニ君のことは？」  
依然として頭を下げたままのハナコに、フェイスマンが問いかける。

「ドゥーニ？ 誰それ？」  
あっさり忘れてくれました。

空港職員の制服に身を包み、管制塔への通路を探すフェイスマンとマードック、そしてハナコ・ヤマダ。彼女の手には、水晶を吊るした紐が握られている。

「こつちよ！」

水晶が揺れる方へと進む三人。もちろんフェイスマンは「ダウンジングなんて胡散臭い」と思っているが、マードックはすっかり信じ込んでしまっている。

あつと言う間に意気投合したハナコとマードックの姿を、一歩下がったところから見ているフェイスマン、何だかちよつと悔しい気もして。ハナコさんは、機嫌よくしている限り、とても愛らしい。きめ細かい肌は白く滑らかでブラマンジェのようだし、キュッとくびれたウエストの細さときたら信じられないほどだ。それに、動きに合わせてサラサラと揺れるストレートな黒髪、その隙間から時折見えるか細い項。いつしかフェイスマンの表情は「トホホ」に変わっていた。

十分後、三人は「管制室」とプレートのかかったドアの前にいた。ドアに鍵はかかっている。フェイスマンはそつとドアを開けた。

管制室では、職員たちが非常に忙しそうにしていた。それはそうだろう、ハイジャック機を素人（モンキー）が操縦している、と思われているのだから。697便が着陸する滑走路をでき得る限り広く取るために、既に着

陸している飛行機や離陸を待つ飛行機を移動させ、離陸時刻や着陸予定時刻を変更させなければならぬのだ。それに加えて、697便の位置を把握し、連絡を取らねばならない。三人の侵入者を気にしている余裕など、職員には全くなかった。と言うか、警備員に見つかるとなく管制室まで侵入者が辿り着ける可能性はない、と職員一同は思い込んでいた。

では、その警備員たちが当時どうしていたのかと言うと、到着ロビーにはほぼ全員が集合していたのだ。

それでなくても混雑しているロビーで、柵を乗り越えようとしたりコングが警備員数名に取り押さえられたのをきっかけに、Aチーム二名+その他二名 vs 警備員大勢の肉弾戦が始まったのだ。

「Aチームのテーマ曲、かかる。」

次から次へと飛びかかってくる警備員たちを、千切つては投げ、千切つては投げするコング。いなしてすかして笑顔でパンチを繰り出すハンニバル。わけもわからぬまま、しかし本能で戦い続けるヴォルフとスタング。一応彼らもロシアン・マフィアの手下の端くれ。それなりに戦えるのだ。

そして状況はと言えば、アメリカに着いたばかりの各国の野次馬が彼らの周りを取り囲み、到着ロビーはプチお祭騒ぎ。中には、本当のお祭と間違えて自国の踊り（フンガフンガしたやつ）を披露し始めるツーリストまで出てくる始末。

そんなこんなで十五分が経過する頃には、ロビーの真ん中には伸びた警備員が山積みになっていた。が、積んでも積んでも次から次へと警備員は湧いてくるのであった。

「このままじゃ埒が開かん。」

と、一人の警備員の首筋にチョップを入れつつハンニバル。

「一体、この空港にや何人の警備員がいやがるんだ……って、おいハンニバル！」

コングが、二人を一度に肩に担ぎ上げながら出入口の方を指差した。そこには、彼らに向かつて走り来る、黒ツナギの集団。空港警備隊の精鋭部隊である。もちろん、

武器（小火器）携帯。

「ヤバいな。」

と、ハンニバル。だってこちらは丸腰。

「ひとまず退散だ。」

「おう！」

修羅場には慣れているAチーム、逃げるとなったら話は早い。ハンニバルとコングは、襲い来る警備員の間を縫って、人ごみの中へと駆け込んでいった。あつと言う間に、人々の視界から消える二人。

「Aチームのテーマ曲、終わる。」

「お、おい、ヴォルフ、おっさんたち、どこ行つたんだ？」  
乱闘の中でスタングが叫んだ。

「え、いないのか？ 知らんぞ、何でいないんだ？」

と、ヴォルフ。

「畜生、奴ら、逃げやがった。」

「逃げたつて、俺たちを置いてかよ。」

「ああ、そうらしい。ぐえっ！（→油断したら殴られた。）」

「俺たちも逃げねえと。ここまで多勢に無勢じゃ、勝ち目はねえよ。隙を見て、外に向かつて走るんだ。」

「おう！」

襲いかかる警備員を振り払いつつ、出口に向かうヴォルフとスタング。追いつがる最後の一人を振りほどき、やつとフリーになって、さあ逃げるぞ、と気合いを入れたその瞬間。

「そこまでだ。動くぞと撃つぞ。」

こめかみに突きつけられたのは、冷たい銃口。ヴォルフとスタング、あつさり空港警備隊に捕まってしまうとき。親分を迎えに来ただけなのに。

バンに戻り、ハンニバルとコングは外を見た。警備員たちが追いかけてくるようなら、バンを急発進させねばならない。が、来た道の方に警備員の姿なし。  
「やけにあつさり逃げられたな。」

そう言つて、ハンニバルは葉巻に火を点けた。

「なあハンニバル、俺たち何か忘れちゃいねえか？」

「フェイスたちのことか？ 忘れちゃいせんよ。」

「じゃなくてよ、あのロシアン・マフィアの奴ら。」

コングの言葉に、ハンニバルはしばし宙を見つめ、ボンと手を打った。

「ああ、あいつらね。忘れちゃいけませんよ。」

コングは「ダメだ、こりゃ」とでも言うかのように、静かに首を横に振った。

ヴォルフとスタングは、後ろ手に手錠をかけられ、背中合わせに床に座らされていた。ここは空港内警備室隣の控え室。彼らを取り囲む空港警備隊員たちは、飽くまでも屈強そうで、かつ、寡黙だ。

空港ロビーで警備員を殴り倒したかどにより、二人は現在、警察に問い合わされ中。いくら警備隊員でも、取り押さえた犯人をどう処分するかは、警察側に判断を委ねなければならぬのだ。二人の写真もFAXで警察に送られ、照合されている最中。

「警察からの返答が来たぞ。」

控え室に一人の警備隊員が入ってきた。恐らく隊長なのだろう、二人を囲んでいた隊員たちが姿勢を正す。

「こいつらは、ロシアからの密入国者として、手配とまでは行かずとも、厳重注意されていた人物だそう。それに加えて、警備員への暴行および業務執行妨害と騒乱罪により、即刻警察署に連行するように、との命令だ。」

「はっ！」

隊員たちが踵を打ち鳴らす。

「それから、お前たち。」

と、隊長らしき男が言葉が続け、びらり、とFAX用紙を掲げた。そこには、ストコドッコイの写真が。

「この男を見かけなかったか？ こいつらのボスで、ロシア・マフィアの親玉、イワン・ストコドッコイだ。」

「いいえ、見かけませんでした！」

「そうか。では、他の者にも聞いてみよう。お前たちも、この男が姿を現さないか、注意してきてくれ。ただし、この男を見つけても、こちらからは手出しをしないこと。我々の手に負える相手ではないらしい。わかったか？」

「イエッサー！」

そして警備隊員たちは、隊長らしき男が部屋から出ていくと、床の二人を立ち上げさせた。

「どうするよ？ 親分、戻ってきた途端に捕まっちゃうぞ。」

いや、捕まらねえまでも、会社に戻ったところで、みんなしてお縄だ。」

スタングがヴォルフにロシア語で聞いた。

「どうしようもねえだろ、俺たち、既に捕まってんだからよ。」

ヴォルフもロシア語で、スタングに返した。

「まずは、こつから逃げなきゃな。」

「どうやって？」

「知るか。」

そんなお喋りも、警備隊員が長銃の台尻で二人それぞれの横っ腹に一撃加えることによって、おしまいになった。

長い迷路のような廊下を抜けて、ヴォルフとスタングの二人は警備隊員に囲まれたまま、護送車のような車に詰め込まれた。鉄格子の向こうの運転席では、警備隊員二名がスタンバイしている。

ほどなく車が発進したが、手錠をかけられた上に丸腰の二人は、どうすることもできず、ただ向かい合って座っているしかなかった。

運転席と護送コンテナとを隔てる鋼鉄の小窓がカパッと開き、鉄格子越しに助手席の男がニカッと笑った。

次の瞬間、助手席の男がガスマスクを顔に当て、小型ガスポンベから何かのガスをコンテナ内に吹きつけた。運転手も、片手でハンドルを操りながら、もう片方の手でガスマスクを顔に当てている。

「誰だ、お前は！」

スタングの隣に座っていた警備隊員が立ち上がってそう叫んだかと思うと、ぐらりと倒れた。

ヴォルフとスタングが覚えているのは、そこまでだった。二人が目覚めたのは、護送車の中ではなかった。

気つけ薬の強烈な匂いに、鼻を擦りながら目を瞬かせる。

「うう……どこだ、ここは？ 誰だ、お前は……？」

朦朧とした頭をはっきりさせようと、ヴォルフは頭を振って、そう尋ねた。

「お、おっさん？」

目の前にいたのは、タクシー運転手のおっさんことハンニバル。そしてここは、数十分前まで乗っていたバンの中。横を見ると、スタングも同じように目を覚ました

ところだった。

「いやいや、危ないところでしたねえ。じゃコング、空港に戻る時ですか。」

道端に警備隊員満載の護送車を捨てて、紺色のバンは空港に戻っていったのであった。

所変わって、ハリウッド・ルーズベルト・ホテルのWTPP会場。ジェイソンが本日の夕方くらいにL.Aに戻ってくるのことから、WTPPは明日の午前十時開始とし、前日から会場を借りて入念な準備がなされていた。しかし、何分、素人集団のすること、飾りつければ飾りつけるほど、文化祭や幼稚園のお誕生日会の香りが漂ってくる。壁面にはフェイスマンのスクール写真（エヴェレット氏撮影）がこれでもかかってほどに並べられているが、まあ、それはいいでしょう。その写真の周囲を飾るのは、花紙で作られたピンクやブルーのお花。そして、あちらこちらには折り紙で作られたチェーンが。

額に汗してチープなお花とチェーンを作っているのは、誰だろう、オリバー&ユリア。二人の指示になぜか素直に従うマサンさんとマドモアゼル・アントワネット。

「助っ人が来たわよ！」

そう叫んで会場の重いドアを観音開きに開けて入ってきたのは、レオタード姿のキム。その両手には、シャツの襟の後ろを掴まれて引き摺られている、クツワダ氏とミラー。クツワダ氏は営業の外回りから帰社するところを、ミラーは入稿してきた帰りを狙われたのだ。狙われ、そして、拉致された。これは「来た」ではなく「来させられた」のであるな。

「私たちも手伝うわ！」

キムの後ろに現れたのは、何と、ガブリエラ。

「ママ！ パバも！」

ガブリエラの後ろには、フリオもいる。もちろん、ガブリエラは新生児を抱えている。花紙を放り出して駆け寄りユリア。

「ママ、おうちで寝てなくて大丈夫なの？」

「ええ、大丈夫よ。ユリアがこんなに頑張ってるのに、ママと赤ちゃんだけ寝てるってわけには行かないわ。」

「あー。」

まだ名もない赤い新生児も、拳を振り上げた。

「キムもアントワネットさんもここにいるんだから、家で寝ているよりも、何かあった時に安心じゃない？」

そう言われて、ユリアは「うん」と頷いた。マンションのみんながいるのだから、心配することなど何もないのだ。

「ありがと、ガブリエラ。」

偉そうに腰に両手を当てて胸を張り、キムが言う。

「みんながバリバリ働いてくれれば、明日の朝までには間に合うわね。」

その「みんな」の中に、キム本人は入っているのか否か。

「そうそう、キム、明日の朝にはちよつと抜けさせてもらって構わんかな？」

挙手をして発言したのはマサンさん。

「ミサに行かんとならんからのう。」

そう、今日はクリスマス・イヴ。なので、明日は当然クリスマス。

「そうね、ミサには行きましょう。」

恐らくキムはレオタード姿で。その上にコートを羽織って。

「マンションに残っているマリアンやハイデン夫妻にエヴェレットさんも誘って、みんなでミサに行きましょう。」

キムの提案に、そこにいる全員が頷いた。みんな、いい顔で。宗教の違いや宗派の違いには気づかずに。

やはりここでもヤンソン一家は村八分にされているのであった。

「ドウニ君が、こんなものを送ってくれたよ。」

フリオが新生児よりも大きな箱を掲げた。会場備えつけのテーブルの上に箱を乗せて、開梱する。

「うわーっ、美味しそう！」

ユリアとオリバーが顔を綻ばせた。ドウニ君（フロム・イタリー）が送ってくれたもの、それは、大きなパネトーネだった。

「ミセス・ハイデンも、ドイツのクリスマス料理を準備してると言ってたぞ、この会のために。」

「それ、いいわね！」

フリオの言葉に、キムがパチンと指を鳴らした。

「高級レストランのビュッフェも手配してあるけど、そういうそれぞれのお国のクリスマス料理が並ぶのも素敵じゃない？」

「それなら、私もいくつか作るわ。と言っても、もう時間もないから、簡単なのしかできないけど。」

ガブリエラ（フロム・メキシコ）も同意する。

「あたしも、料理は得意じゃないけど、一丁やってみましょうかね。」

アントワネットさん（フロム・フランス）も言う。

「クツワダさん、あなたも何かクリスマス料理を？」

ミラーがクツワダに尋ねた。

「料理ができないわけじゃないが、日本にはクリスマス料理なんてないからな。クリスマスにはKFCのチキンと不二家のケーキっていうのが定番だ。」

「それじゃあ、ミスター・クツワダはチキンとケーキを買ってくることに。」

キムがビシリと仕切る。

「僕はイギリス風の何か、作ってみますよ。クツワダさん、準備が楽そうだから、手伝って下さい。」

困っている顔のクツワダ氏に、ミラーが言った。

「君、イギリス出身だったのか。」

「いえ、僕自身はアメリカ生まれみたいなんですけど、養父母がイギリス系だったんです。」

「そ……それは失礼した。」

立ち入ったことに触れてしまったと思い、クツワダ氏は頭を下げた。

「気にしないで下さい。」

明るい顔で、ミラーは辺りを見回して言葉を続けた。

「それにしても、随分豪華なクリスマスパーティーですね。」

え、とクツワダ氏は思ったが、WTPPとクリスマスパーティーとが合同で行われるのか、と思ひ直し、敢えて詮索はしなかった。

空港警備隊の制服に身を包んだ、ハンニバル、コング、そしてヴォルフとスタング。「空港のSWAT部隊」と

も言われる空港警備隊員の服だけあって、大柄なヴォルフやスタング、部分的に大柄なハンニバルやコングにも、その制服は無理なくフィットしている。ありがたいことに、空港警備隊の皆さんは、サングラスもしくはゴーグルを常備着用して下さっている。脇に抱え持つヘルメットには、濃い色のバイザーまでついている。さらにありがたいことに、制服の胸にはネームプレートまでついている。そんなわけで、空港に戻った四人は、すんなり空港警備隊の中に潜り込め、ハイジャック機の非常着陸に備えてそれぞれの持ち場に配置されていた。

彼ら四人の目的は、二つ。一つは、ハイジャック犯をとつちめて、民間人を無事に救出すること。これは、空港警備隊の目的とも一致している。もう一つは、キンケイド氏は放っておいても構わないが、ロシアン・マフィアの親分を空港警備隊員に目撃されることなく空港の外に逃がすこと。そのためには、四人は空港警備隊員よりも先にハイジャック機に乗り込み、コクピットに向かわねばならない。

しかし、いずれの目的よりも大事なことは、空港警備隊員に彼ら四人のうち一人として偽者だと悟られてはならないということ。これが難しい。ハンニバルとコングはこういう状況に慣れているのでいいのだが、あとの二人がヒヤヒヤさせられる。

一方、管制室では。マードックは知識豊富な職員として問題なく周囲に溶け込み、率先して対処に当たっている。無論、奇抜なアイデアを出してはいるのだが、それがまた理に適っているものだから、他の職員たちも「目から鱗が落ちた」という思いでマードックの指示に従っている。フェイスマンはフェイスマンで、この手の知識はないものの、必要なデータを揃えて渡す、ということに関してはお手のもの。職員が必要としそうなデータを前もって準備しておき、言われる前に差し出す、という敏腕秘書振りを発揮していた。ハナコさんはと言えば、絶妙なタイミングでコーヒーを渡したり、必要になったデータを片づけたりと、それなりに働いている。そして、ここで最も重要なことだが、この三人、不審者だとは全く気づかれていないのであった。

地上で七人もの不審者が空港内部に潜入していることなど露知らず、岩石パンチのガウデンシオはケーキを貪り食っていた。

キンケイド氏は、「あの男がいつか仲間のロープを解くのではないか」と考えていた。幸い、未だ三人以外の誰も目を覚ます気配はない。ストコドッコイは紅茶片手に何事か考え中。

「あの、目を覚ました人って、ハイジャック犯の一味なんですか、どうでしょう?」  
「うん、今それ考えてたところ。」

どうやらストコドッコイもそのことに気づいていたようだ。キンケイド氏に言われなくても。ロシアン・マフィアのトップに立っているだけある。

「何でわかったんですか、あの人がハイジャック犯の一味だって。」

キンケイド氏は不思議で不思議で仕様ががない。「勘。」

しかし、一言で説明終了。

「ハイジャック犯たちは客室に全員転がしてあるから、そいつがロープを解いて無理矢理起こして、つてこともあり得るよね。」

「あり得るって言うか、ケーキがなくなったら、そうするに違いありません。余程の馬鹿じゃなければ。」

「余程の馬鹿なんじゃないかと思うけどね、こんな状況でケーキ食べてんなら。」

そこでストコドッコイは、うーん、と唸った。

「不安材料は取り除いておいた方がいいよね?」

「そりゃそうですよ。」

「その起きてる奴、どんな奴?」

まだガウデンシオの姿を見ていないストコドッコイは、キンケイド氏に尋ねた。

「甘党です、すぐく。」

「そんな情報、いらぬ。」

「でかくて強そうです。」

「そりゃ面倒だ。」

「ハルクみたいな感じですか。」

「緑色?」

「いえ、色は普通です。」

「じゃあハルクじゃないじゃん。他には?」

「右利きでした。それから……ええと、そうそう、フォークを持った手が何かちよっと変でしたけど……何がどう変なんだ?」

ガウデンシオの手元を見た時に覚えた違和感を思い出そうとするキンケイド。

「僕に聞かれても。」

肩を疎めるストコドッコイ。今度はキンケイド氏が考え中。自分の手を見つめながら。

「手がですね……そう、手を握った時に、ここところが凸凹してなかったんですよ。」

やっとわかった、という風な顔で、キンケイド氏は自分の手の甲を指した。指のつけ根の凹凸を。

「ああ、なるほど、ハードパンチャーなかも。で、右利きね。オッケ、わかった。何とかしてくる。」

ストコドッコイはレバーをいくつか操作した後、操縦席から立ち上がった。

「あんまり気は進まないけどね。」

悲しそうな、困っているようにも見える薄い微笑みを残し、ストコドッコイはドアの外に出ていった。

さて、準備も佳境のWTPP兼クリパ会場。キムの指示により、皆、テキパキとは行かないまでも、それなりの速度で手と足を動かしている。

「キム、この子豚の丸焼きはどこに置く?」  
と、クツワダ氏。

「そっちのテーブルの上に置いてちょうだい。」

「キム、花輪は入口のドアの前でいいの?」

と、ユリア。

「あ、入口のところにはテンピーのパネルが置いてあるから、お花はプールサイドの方に持って行って。でもユリア、あなたじゃ運べないわね、誰か男手を。」

辺りを見回し、相応しい殿方を探すが、皆、忙しく立ち働いており、差し当たって手の空いている者は見当たらない。

「仕様がないわね、じゃあ、あたしが、つて、ねえ、そう言えば、テンピーの友達はどうしたの?」

不意に気づかれてしまうAチームの不在。

「彼らにも手伝ってもらえればありがたいんだけど。もちろんテンピーには内緒で。」

「ええと、あのおじさんたち、みんな空港に行ったみたいですよ。」

「空港? そんなどこに何しに行ってるのよ?」

「確か、オリバーのパパを迎えに……行つたとか……。」

ユリアには、ちゅうか、この部屋にいる一部の皆さんには、ハイジャックの事実はどうも知らずとしか伝わってなかった。そして、ハイジャック事件のことを知っているはずのキムは、自分とは関係ないことなので、すっかり忘れ去っていた。

「呼び戻しましょう。」

キムは高らかに宣言した。

「ブリヴェーット! お兄さん、ご機嫌だね。」  
軽くロシア語で挨拶なんぞかましながら、ガウデンシオに近づくとストコドッコイ。

ガウデンシオは、上機嫌で顔を上げた。普段の彼なら、見知らぬ人物の登場に上機嫌で対応なんぞあるわけがないのだが、目下、七つ目のホウルケーキを解凍して皿に乗せ、そしてチョコペンで何やらデコレイト中という至福の時間の真ん中。機嫌もよくなるうというもの。

「おう、兄さんも食うかい、この誕生日ケーキ。」

「誕生日ケーキ? ただの白ケーキじゃないの?」

「今んとこは白ケーキだがな、今からこのチョコペンで誕生日ケーキにするのさ。」

「へえ、そいつはいいね。で、誰か誕生日なの?」

「それが問題よ。確か俺の仲間の誰かが誕生日だったんだが、誰だか思い出せなくてな。誰だったかなあ、あんた知らねえか?」

ストコドッコイ、知るわけがないので、軽く肩を疎めてノーを表現。

「やっぱりな。俺、あんたは知らねえんじゃないかと思つたんだ。だって俺、あんたのこと知らねえからよ。」

噂に違わぬ馬鹿だ、と、ストコドッコイは思った。が、チョコペンを握る大男の拳と筋肉の絶妙なこなれ具合を見て、それについて口にするにはよしておいた。

「残念だね。で、どうするの、その誕生日ケーキ。」

「いや、これから仲間を起こしてよ、誰が誕生日だったか聞こうと思ってるのさ。」

「起こす？」

「ああ。」

起こされては厄介。

「……起こすのはあまり上手くないんじゃないかな。だって、ほら、誕生日パーティーってサプライズでやりたいじゃない？」

「そりゃまあそうだが、本人を起こさなけりゃいいじゃないか。誰か知ってる奴に聞けば。」

「誰が本人かわからないんだろ？ 起こした奴が本人だったらヤバイじゃん。」

「……それは……あんたの言う通りだな。でも、他に方法があるのか？」

「ある！」

スットコドッコイは、キッパリと言いつつ切った。

「どうやるんだ？」

「えーと、ええとね、そうだ。ケーキにね、全員の名前を書くんだよ。全部書きゃ、一人は当たってるだろ？ そしたら、蠟燭立ててお祝いもできるじゃん。誰かが起きて誕生日の奴が判明したら、他の名前はチョコで塗り潰せばいいんだし、上から生クリームって手もあるし。」

「そりゃ名案だ！ チョコの上からさらに生クリームなんて豪華じゃねえか。うははは、あんた、頭いいな！」

そう言つてガウデンシオは、スットコドッコイの背中をバシバシと叩いた。

「ゲホッゴホッ！……ほ、褒めてくれなくていいから、じゃあ早速、仲間の名前を書いていこうか。ええと、全部で何人いるんだっけ？」

「三十六人。男が二十七人で女が八人。」

「三十……五人だね？」

「そうそれ。」

と、言いながら、ガウデンシオはチョコペンを取り上げてケーキに名前を入れた。

約一時間後。スットコドッコイは、この場にいるマザー・アース友の会会員全員の氏名を把握……はできていないにせよ、目にはすることはできた。

ピンポーン。

まともなチャイムがキンケイド家に響いた。

「はーい。」

テーブルまで引つ張ってきた電話の前に座り続けてもう何日？ という状態のマリアンは、どっこいしょ、と腰を上げ、インターホンを取った。

『マリアン？ ハイデンです。』

『ミセス・ハイデンの声だった。』

『今開けるわ。』

と、玄関へ向かうマリアン、「オリバーに何かあったのかしら？」と嫌な予感がした。ハイデン夫妻がこの家を訪ねてくるなんて、今までなかったことだから。

「どうしたの？」

ドアを開けると、そこにはハイデン夫妻が立っていた。

「その様子じゃ、まだ知らんようだな。」

「ええ……。」

「何？ オリバーに何か？」

心臓がきゅつとなったような気がした。

「いやいや、オリバーのことじゃない。あんたの旦那。」

「ブライアン？」

「そう、そのブライアン。ハイジャック機に乗ってるのは知ってるな。その後の情報で、あんたの旦那はハイジャック機にただ乗っておるのみならず、ハイジャック犯をふん捕まえて、今、ジェット機を操縦してこっちに向かっとうる事がわかった。」

真面目な顔でミスター・ハイデンが言った。彼はおよそ常に真面目な顔をしているんだが、どんな表情をしていようと、彼が冗談を言うことなどあり得ないだろう。

「ちょっと待って、ハイデンさん、何でブライアンが？ あの人、ジェット機の操縦なんてできないわよ？」

「ねえ、マリアン、操縦ができるかできないかは問題じゃないと思うの。」

優しくミセス・ハイデンが言う。

「大事なことは、あなたが空港に迎えに行つてあげることに。そうじゃない？」

「迎えに？ でも、私にはWTPPの準備が……。」

「電話番号なら私が代わるから。会場の準備は、キムやア

ントワネットさんが頑張ってくれてるわ。それに、もう今更そんなに電話なんてかかってこないでしょう？」

「そ、それはそうだけ……。」

「空港にはスミスさんたちが既に待機しておる。ほら、すぐに行つてやりなさい。」

「でも、オリバーは……？」

「オリバーはユリアと一緒に、会場でキムのお手伝いをしてるはずよ。何かあったらキムから連絡が入るはずだから、安心して迎えに行つてらっしゃい。」

「……下手をすると、旦那と二度と会えなくなるかもしれないから……。」

ミセス・ハイデンの声に被せるように、ミスター・ハイデンが小声で言った。

「ほらほら、マリアン、考えている暇なんてないですよ。」

マリアンの手を取り、ミセス・ハイデンが引つ張る。

そんなわけで、それから数分後、マリアンは車に乗つて、空港に向かうしかなかった。

ロサンゼルス国際空港のロビーは、特にパニック状態になってはいなかった。「アプダビ発の便が非常事態により胴体着陸の可能性もあるため、発着便の予定が多少変更になります」とのアナウンスが繰り返し流され、乗客たちはその変更に従順に従っている。カウンターの文句を言っている客もいない。ほとんどの人々が、電光掲示板をじっと見つめている。

そんな中にマリアンは足を踏み入れた。

「何かお困りでしょうか、お客様。」

そう言つてジェントルに近づいてきたのは、空港職員制服を来たフェイスマンだった。

「テ、テン……ええ、ええと、ジェイソンの従兄弟の……。」

マリアンはフェイスマンの顔を見て、つい「テンピー」と言いそうになつてしまった。

『そう言えば、この人の名前、何だったかしら？ ジェイソンに電話で聞いたはずんだけど……。』

「テンブルトン・ベック。ごく簡単に、フェイス、とお呼び下さい。」

「で、フェイス、あなたここで何してるの？」

シツ、とフェイスマンは人差し指を口の前に立てた。  
「暇潰し。……何か俺の出る幕なくって。」

というの表向きで、実は彼、警察やICPOやFBIなどが空港に押しかけてスットコドッコイを捕らえようとするのを、阻止するのは無理としても、そういった輩が現れたのをハンニバルたちに報告する役目、ついさっきになったのだ。

マードックは依然として管制塔でこの空港のすべてを牛耳っている。また、警備の方はハンニバルが牛耳っている状態。

「マリアン、君は旦那が心配で来たんだよね？」

「え、ええ……まあ、そんなところ。」

あんまり心配じゃないんだが。

フェイスマンは腰に下げたトランシーバーを手にし、スイッチをオンにした。

「こちら発着ロビーです。ハイジャック機を操縦しているお客様の奥様がいらっしやっています。どなたか状況をご説明して、それなりの場所にご案内していただきたいのですが。」

『了解、広報担当の者を行かせる。』

「お願いします。」

スイッチをオフにし、フェイスマンはマリアンに向き直った。

「今、係の人が来るから、その人の言う通りにして。で、旦那と合流できたら、できるだけすぐに帰ること。危ないかもしれないからね。」

「わかったわ。」

マリアンにウインク一つ投げかけると、フェイスマンは十数フィート向こうにいる美人さんに向かって、真っ直ぐ歩いていった。

「片づいたよ。」

スットコドッコイがキンケイドの元に戻ったのは、ちょうど一時間と十分後だった。

「あ、お疲れさまです。」

バックヤードでキーキの空箱やら何やらの後片づけをしていたキンケイドが顔を上げた。

「厄介だったでしょう、あいつ。」

「それほどでもないよ。不意を突けばちよろいもんさ。それに、あの手のを確実に倒す方法も知ってるし。」

「確実に倒す方法？」

「うん。今日はやらなかったけどね。簡単な方法だよ。」

「へえ、すごいな。どうやるんです？」

「どうって、あんたもやってたじゃん。甘いもの食わせまくるの。十年も続けりゃ確実に糖尿で倒れるつしよ。」

「ああ名案だ。……でも、それじゃフライト中には無理ですよ。」

「うん。だと思って、今回は普通の方法にした。」

「普通の？」

「うん。後ろ頭、思いっきり殴って縛り上げた。」

「ワイルドだなあ。」

キンケイドは感心して言った。大学卒業後、真面目一筋のサラリーマン生活を送ってきた彼にとつて、スットコドッコイのような人種は物珍しく興味深いのだ。

「さて、そっちの片づけが済んだら、コクピットへ来てよ。そろそろ着陸のこと考えなくちゃ。」

場面変わって、こちら管制塔。流れるような手順でハイジャック機の受け入れ態勢を整えたマードックは、メイン管制官の席で鼻歌を歌っていた。足はコンソールの上へ上げ、腕を頭の後ろで組んだりラックス・スタイルその両脇では、二人の管制官が、必死で697便への呼びかけを続けていた。

「♪シーシーもーやーすーまーず、ほうちよーのーひっびーきー。」

「697便、応答せよ、応答せよ！ ダメです、応答しません。」

「♪こっつんつめつめつめつたつまつ、もーりーのーかつじーやー。……で、着陸まであとどんくらい？」

「一時間を切ったくらいです。」

「うーん、そろそろ交信しときたいねえ。」

「ええ、空港周りには雷雲もありますし。しかし、どうしたんでしょう、697便は。何か重大なトラブルがあったということ……？」

「それは大丈夫じゃない？ さっき操縦してた人、案外冷静だったし。ま、気長に呼び続けてみてよ。」

「ラジャー。」

管制官たちは再度周波数を合わせ、呼びかけ続けた。

「697便、697便、応答せよ。」

「……ちら697便です。……えーと、どうぞって言うんでしたっけ？ ど、どうぞ。」

聞こえてきたのは、キンケイドの声。

「697便、現状を報告せよ。」

管制官が呼びかける。

『報告、報告ですって。……え？ 名前？ 名前言えはいいですか、はいはい。』

「697便の奴は誰と喋ってるんだ？」

「ちよつと貸してみ。」

そうやってマイクを奪うマードック。

「ハロー、元気？」

「は、はい、元気です。」

『今どんな感じ？』

「……え、えーとですね、飛行機は順調みたいです。」

キンケイドの後ろで、「名前、名前」と囁く声がした。

『あ、はい、名前です。』

「あん？」

『ハイジャック犯の人たちですね、ええと、名簿を入力しました。なので、これから名前を読み上げます。メモして、当局ってどこですか？ 警察？ 当局は当局？ えー、じゃあ、当局に連絡して下さい。』

「名簿？ すごいじゃん。えーとね、当局は置いとくとして、とりあえず言ってみてくれるかな、えーと。」

『私の名前はキンケイドです。ブライアン・キンケイド。じゃ、行きますね、マザー・アース友の会会員。リーダー。アン・メリボンド。フランカ・アーチェル。ケネス・フォウンテン。』

「ちよつと待って、リーダーがアン・メリボンドなの？」

『わかりません。続けますね。クラウ・ビーンズ。おやびん。UM・ライオン。フランス人の彼。マルシアかアリシア。ジョンの弟。ジョンの弟の彼女。』

「ちよつと待って。それ名簿？」

『正確には、名簿……か、誕生日ケーキ？』

「誕生日ケーキ？」

『……続けます。先週会った方のディラン。ここしばらく

くご無沙汰だったデイラン。キミオ・ナカソネ。水っばいマーフィー。俺のジュリア。ニードラー。アドラブレ・クージ。マーセル・コーカスとラビ。足が速いウサギちゃん。ミスター・チョコドーナツ……。」

「何でしょう、これ。気でも違ったんでしょか、彼。」

「もしくは、暗号とか。」

管制官が首を傾げる。

「いや、結構マジかも shouldn't だよ？ とりあえずメモしといてよ。」

マードックが椅子をぐるっと回しながら言った。

キンケイドがもう一度、誕生日ケーキ上の名前を読み上げ、管制官はそれをメモに取り、復唱した。

「以上、ええと、にのしの……三十五名だな？」

「ちょっと待って下さい、にのしの……そう、三十五名です。」

後ろで誰かが「男二十七と女八」と言っている。

「男二十七人と女八人だそうです。」

「君の他に誰かいるのか？ その、何だ、起きているのわかっていう意味で。」

管制官の一人が、マイクに向かって尋ねた。

「いいえ、私一人です。」

キンケイドがどきどきと言い放つ。

「まあまあ、いいじゃん、そんなこと。それより、そのメモ、保安部隊つーの？ 警備の人に渡してきてくれない？」

ハンニバルやロシアン・マフィアから話を聞いて、ストコドッコイの存在はわかっているマードックが、のほほんとしながらも話を遠ざける。

「それよかブライアン、あと、そう、五十分弱でその飛行機、こっちに到着するわけなんだけど、どう？ イケそう？」

「着陸させられそうか、ってことですか？ え、何？ 天気？ そちらの天候は？」

「ん？ 曇るところにより晴ってな具合。今はちよつち雷雲がのさばってっけど、着陸する頃には消えてくれんじやねえかな。」

「なら大丈夫そうです。」

ブレーキかけるタイミングを間違うと、ターミナルビルに突っ込む。OK?」

「ああ、はい、気をつけます。」

「十分前になったら、進入角度なんかを教えるんで、しばらくは快適な空の旅をお楽しみ下さい。あ、それから、着陸直後に保安部隊って言うの？ 警備の人が突入するんで、よろしく。ドア開けて待っててね。抵抗しないように。それとね、マリアンが空港に来てるって。ここで伝言です。」

マードックは息をすうと吸った。

「このストコドッコイ！ ヴォルフとスタングが心配してるわよ！」

大声に驚いて、管制塔の全員の視線がマードックに集まる。

「以上、通信終わり。」

「ヴォルフとスタングって誰だろう？」

通信が一方的に終わった後（しかし回線が切断されたわけではない）、キンケイド氏はキーキを持ったまま首を捻った。そんな名前、知り合いいはないはず。

「ヴォルフとスタングってのは、僕の部下。マリアンってのは知らないけど。」

「マリアンは私の妻です。」

「あ、そう。……ってことは、あの管制官、只者じゃなさそうだな。」

「ええ、我々の味方っていう雰囲気でした。」

二人はしばらくの間、口を閉じていた。

ストコドッコイは、あの管制官の言葉から、着陸後もコクピットにそのままいたら、彼の正体を知る警備隊に捕まってしまう、と気づいた。

キンケイドは、彼の妻マリアンが空港に来ているということは、こんな事態に巻き込まれて心配をかせいだかどにより、棒でぶたれるのではないかと考えていた。頭の中に、棒を振り被るマリアンの姿が浮かぶ。それと、泣きじゃくる我が子、オリバーの姿が。

目の前に紙ナプキンが突きつけられ、キンケイドは顔を上げた。そこには文字が書かれている。

「何です？」

「これ、さっきの管制官に伝えて。」

「……？ はい、わかりました。」

ストコドッコイに頼まれ、キンケイドはハンドフリーマイクを頭につけた。

「もしもし。もしもし。697便です。誰かいませんか？」

「こちら管制塔。何だ、697便。」

「さっきの人に代わって下さい。さっきの怒鳴ってた人。」

「了解。」

椅子の上に土足で正座して、ぐるぐる回りながらも、697便と同時に到着予定のNY発241便と話をつけていたマードックに、無言でマイクが渡される。

「はい、おまつとさん。どした？」

「697便のキンケイドです。マリアンに伝言を頼みます。ええと、スタングはパイロットになりましたがっていいけど、夢を諦めたろうか。ヴォルフは寝た振りをしていないだろうか、です。……あ、あともう一つ。私が無事に着陸できたら、棒でぶつのはやめてくれ、とマリアンに伝えて下さい。」

「へいへい、了解しましたよ。」

「それとですね、マザー・アース友の会の人たちは、みんな縛ってあるので、他の人と区別しやすいかと思えます。」

「そりやどうも、ご丁寧に。」

「とりあえず、以上です。」

「そんなじゃ。」

マイクを管制官に返すと、マードックはキンケイドが言ったことを、その辺にあった紙の裏にメモした。それをハナコに渡す。

「これ、ハンニバルに届けて。」

「誰、それ？」

そうだった、ハナコさんはまだハンニバルに会っていません。仕方ないので、マードックはダウンジング用の水晶を額に当て、念を送った。ハンニバルのヴィジョンを。

「これで、クリスタルが君を導いてくれるだろう。」



「わかったわ。」  
頬を染め、ハナコは管制室を出ていった。

「つまりだ。さっきあなたに伝えてもらったのは、この飛行機が着陸した時に、僕はコクピットにいるんじゃないよ、客席で寝た振りをしているよ、ってことなんだ。うまくそのことが伝わればいいんだけど。どうも、空港警備隊には僕の正体がバレてるみたいなんですね。」

通信の後、スットコドッコイはキンケイドに種明かしをした。種明かしと言うほどのものではないんだが。「もし僕が警備隊に捕まったら、警察に送られて、その後、ロシアに強制送還されて、向こうの収容所で一生を終えなきゃならない。そんなの、やだし。」

「ああ、そうでしょうねえ。私も、妻に棒でぶたれるのは嫌です。」

「棒で?」

「ええ、棒で。」

二人は溜息と共に、首を横に振った。

「とういわけなんで、僕は着陸後、ドアを開けて、グッシュで客席に座って寝た振りをする。あなたは、着陸させた振りをする。いい?」

「わかりました。」

「そうすれば、あなたの奥さんだって、ハイジャックから乗客を救った英雄を棒でぶったりしないさ。」

「そうですね!」

いや、マリアンなら棒でぶつね。いくら英雄でも。

滑走路脇に待機している警備隊員たちは、等間隔に立ち、無言で前を見つめていた。

水晶の揺れに従い、ハナコはここまでやって来た。空港職員の制服を着ているので、何も怪しまれることなく水晶をぶらぶらさせているのは、空港では「怪しい」と見なされないようである。

直立不動の警備隊員たちは、ハナコが数フィート後ろをゆっくり歩いていても何も反応せず、それはあたかもハンケチ落としのようできえあった。

とある隊員の後ろで、水晶がぐるぐると回り始めた。  
『この人?』

ハナコは心の中でそう思い、その隊員に小声で話しかけた。

「ハンニバルさんですか?」

隊員は微かに頷いた。

「これ、マードックさんからあなたに渡すように、ことづかりました。」

後ろから肘越しに、そっとメモを渡す。

「君の名は?」

隊員は前を向いたまま、メモを受け取り、そう尋ねた。

「ハナコ・ヤマダです。」

「ありがとう、ミス・ヤマダ。では、彼のところに戻ってくれ。」

「わかりました。」

ハナコは来た道に戻っていった。

ハンニバルはメモを開いて読み、サンバイザーつきヘルメットの中でニツカリと笑った。

ハリウッド・ルーズベルト・ホテルのWTPP会場では。

率先して指示を執っていたキムが「空港に行くって残された人々は、その後数時間は与えられていた仕事をこなしていたが、遂にすべきこともなくなってしまう、三々五々帰途に就いた。と言っても、皆、帰り着く先は同じ。だが、明日のために買いたい物が必要な人々も多い。フリオ一家とオリバーは、フリオの運転するタクシーに乗って、買い物の後、帰宅。その頃にはもう、アントワネットさんの運転するヴォルフの車で、マサンさんにも帰宅。」

クツワダ氏はミラーの運転するクーペの助手席に、窮屈そうに座っていた。

「ミンスミートパイを作ろうと思うんです、イギリスのクリスマス料理として。本当は鴨のローストが好きなんですけど、結構高いですからね、鴨は。」

「ミートパイか。」

「いいえ、ミンスミートパイです。肉は入りません……入らないと思います。何が入ってたっけかな、リングゴ、アーモンド、レーズン、チェリー、オレンジピール……」

オレンジやレモンを搾った覚えもあるし……ああ、作り方、わからないや。本屋に寄ってもいいですか?」

「ああ。で、その後、買い物をして、どこかで食事しないか?」

昼食を食べ損ねていて腹ペコのクツワダ氏、腹がグルキューと鳴っている。それを聞いて、ミラーは笑うのも失礼かと、口の周りを緊張させた。

近所のファミリールレストランの窓際の席で、クツワダさんがおろしハンバーグにコーンスープとライス、ミラー氏がマウントキャニオン・パフェをやっつけている間にも、事態はあちこちで進行していた。

ロサンゼルス国際空港の上空で旋回を始めているのは697便、眠る乗客と起きている二人を乗せた旅客機である。

「準備万端みたいだね。」

眼下に見える滑走路を確認しながら、スットコドッコイが言った。現在時刻、午後四時少し前、日没にはまだ間があるが、697便のために、既に滑走路両脇の誘導灯が点灯している。

「ぼ、僕にはよくわかりませんが、あの光の筋の間に降りるんですか? あわわ。」

旅客機にはあるまじき急旋回にコ・パイの椅子から転げ落ちそうになりつつキンケイドが答える。

「そう。間以外のどこに降りるってのよ。真上に降りたら器物破損だよ。」

「だって、随分狭いですよ。上手く降ろせますか?」

「狭いってのも機体の幅よりはあるのよ、ああ見えて。」

「ああ、安心しました。じゃ、とつとと降りましょう。」

「もうちよつと待って。今、燃料消費してるから。」

「燃料消費?」

「ほら、オーバーランしてどっかにぶつかった時に、燃料一杯だと燃えるでしょ。」

「オ、オーバーラン!」

「そーゆー可能性もあるってこと。深く考えなくていいよ。」

ストトコドッコイはそう言うと、操縦桿をぐいと右に倒した。一拍遅れて機体が言うことを聞く。キンケイドは、右手で額の汗を拭いながら、左手でぐっと椅子の座部を掴んだ。

所変わってここはファミリーストラン。おろしハンバーグとコーンスープを平らげ、残ったライスにタバスコを振りかけて突つくでもなく拗うでもなく弄んでいるクツワダ氏の視線は、目下、自分の目の前で「山」と格闘している男前に注がれていた。

「それ、何人前くらいあるのかね？」

クツワダ氏は、ミラー氏に問いかけた。何しろ、ミラー氏が今戦っている相手と言ったら、ものすごいのだ。園芸用のブリキバケツに積み上げられたバナラとチョコのアイスクリームは、五ガロンは軽いだらう。その下からは、シロップに漬かったスポンジケーキが顔を覗かせている。ケーキの隙間にはアンズやらプルーンやら、悪い系のドライフルーツが差し込まれ、アイスの上にはクロテッドクリーム(ホイップクリームではない!)、その上にはリングゴの克蘭ブルとキャラメルソース、そして無数のチョコレートバーが刺さっていたり、いなかたり。

「さあ、いつも食べてるから一人前のような気がしてますが、本当は二、三人前くらいじゃないでしょうか。」

「いつも食べてるって? これを?」

「ええ。週に五回くらいかな。食事の代わりに。出前してくれるんですよ、ここ。」

「体に悪くはないかね。」

「どうでしょう。あまり健康には留意していないものですから。それよりも、締切の方が心配で。これだったら、上のチョコバーを齧りながら原稿を描き続けられますし。」

ミラーさん、かなり偏食のようです。

「しかし、それじゃあ下のアイスが融けるじゃないか。」  
「融けたアイスとキャラメルソースが下のスポンジに染みたくところが、また美味いんですよ。」

「そう言いつつ、見る見るうちにマウントキャニオン・パフェを平らげていくミラー。」

「そう言えば、今度歓迎会をやるテンピーって人も、チョコレートバーが好物らしいな。」

クツワダが、思い出したようにそう言った。

「本当? 初耳だな。実は僕も、このチョコバーが何より好きなんです。ご飯の前にこればかり食べて、随分養母に怒られたものです。」

「そりゃ怒るよ、普通の親なら。」

「いやあ、仲よくなれそうだな、テンピー。」

ミラーは、そう言うと、残りのアイス汁をぐぐっと飲み干した。

空港には、まだ警察もICPOもFBIもCIAも押しかけては来ていなかった。が、情報は漏れるもので、どこからかハイジャック事件の情報を入手したマスコミが空港に押しかけていた。

無論、空港には広報担当部署があり、広報担当官がいるのだが、目下のところ彼らは「この事件を包み隠さず報道してもいいのかどうか」という初歩的な問題について討議しており、ロビーで報道員たちの対処をしているのは、結局のところ、フェイスマンなのであった。

突きつけられたマイク、周りを取り囲むテレビカメラ、体む間もなく焚かれるフラッシュ、矢継ぎ早に出される質問に、フェイスマンはいい気になっていた。でも、言っていることは「ノーコメント」のみ。だってフェイスマン、現在の状況、わかっていないのも。ハイジャックされたのはわかっているけど。

さて、報道員たちがインタヴューしたいはずの人物、マリアンはどうしているのかと言うと。フェイスマンがステキな角度でカメラ視線を開始するよりしばらく前、広報担当官の下っ端がマリアンを迎えにロビーに現れたのだが、下っ端はマリアンを広報室に連れていく間にマリアンとはぐれ、現在、二人とも行方不明中。お互いに相手を探して、あっちへうろうろ、こっちへうろうろ。そんな折、ロビーに不審な人物が現れた。レオタード姿で、「ジェイソンの従兄弟の友達の人!」と叫んでいる。当然、キムである。

「ジェイソンの従兄弟の友達の人! どこにいるの! この辺にいるのはわかっているのよ! 出てきなさい!

そして私に従いなさい!

フェイスマンには、彼女の声が聞こえていた。カメラマンたちの隙間から、彼女の姿も見えた。それでなくても忙しい今、キムに見つかりたくはない。今に限らず、キムには発見されたくない。再び拉致されるのは嫌だ。

そこで、フェイスマンはじわりじわりと立ち位置を変えていった。キムから離れるように。フェイスマンの移動に伴い、マスコミの塊も、じわりじわりと進んでいった。

一〇一号室のキッチンでは、ミラー君とクツワダ氏が腕捲りをし、調理台に向かい、先刻買った料理の本を見つめている真っ最中だった。彼らの後ろには、多数の紙袋が。その中には、リングゴ、オレンジ、レモン、アーモンド、レーズン数種、ドレンチェリー、オレンジピール、レモンピール、各種スパイス、ブラウンシュガー、ヘット、ブランドー。それから、すっかり解凍されたパイシートどっさり。

ミンスミートパイのレシピを熟読する男二名。

「ここに書いてある分量じゃ足りませんよね?」

「ああ、これじゃ全員に行き渡らないだらうな。」

「ええと、このレシピの四倍の量で作りますよ。やけに『四分の一個』って書いてあるから。」

「いやあ、キムの話じゃパーティには世界各国から大勢集まるって言ってたから、八倍でもいいんじゃないか? この際、十六倍だって構わないと思うぞ。」

「十六倍? 材料、足りませんか?」

「わからん。この『パイ生地』ってのは買ってきたパイシートで代用するんだろ? リングゴは足りるな。この『型』ってのは?」

「買ってないです。何か皿っぽいいいんじゃないですかね、ちょうどよさそうな大ききの。」

「オーブンは使えるのか?」

「使ったことないけど、使えると思いますよ。」

ミラーは、ガスコンロの下のオーブンのドアを開いた。

「はい、説明書。」

オーブンの中から説明書を出し、クツワダ氏に差し出す。

「あ、そうだ、僕、カメに餌やってきます。」

説明書を開き、クツワダ氏は「今夜も徹夜かな」と思い、溜息をつきつつも、グレン・マレイのポトルに手を伸ばした。

マドモアゼル・アントワネットは、マスナン爺さんに呼ばれて彼の家で早い夕飯(冷凍製品を温めたもの)をご馳走になった後、今は亡き彼の妻直伝のブレンド・ハーブティーを啜り、すっかり寛いだ時分、やっと思い出した。フランスのクリスマス料理にはどんなものがあったか、同郷のエヴェレット氏に聞こうと思っていたのだ。マスナン爺さんはインドネシア系で元々は中近東の方の流れだと言うので、フレンチには役に立たないから。

マスナンさんに暇乞いをし、アントワネット嬢は一階に下りてきた。そして、エヴェレット氏宅のドアチャイムを連打。だが、返事はない。しかしながら、ドアに鍵はかかっていない。

「エヴェレットさん！ 入るわよ！」

一応、断る辺り、淑女である。淑女は夕刻に一人暮らしの独身男性の家に侵入したりしないのだが。

それはそれ、ドカドカと上がり込んだ淑女は、ベッドの上に倒れ伏している任人を発見した。うつ伏せで、微動だにしない。

「……ムッシュー？ 死んでるの？」

「いえ、生きてます。」

微かな声が聞こえた。

「その声は、マドモアゼル・アントワネットですね。」

「ええ。」

「済みませんが、救急車を呼んでもらえませんか？ 尻と腰が痛くて動けなくて……。その上、空腹で……。」

さらにその上、トイレに行くこともできず、部屋の中はほんのりとアンモニア臭い。

「わかったわ。でも、その前に、フランスのクリスマス料理って何があったかしら？」

「ブッシュュ・ド・ノエル？」

「甘いものじゃない方がいいわ。」

「それじゃあ、生牡蠣？ 鮭の燻製？」

「もう少し安いので。」

「フォアグラは高いから……七面鳥の栗添え？」

「七面鳥だって十分高いじゃない。」

「ええと、それじゃあ、うーん、チーズのポレットは？」

説明しよう。チーズのポレットとは、ベネディクトインなどのリキュールを加えて練ったナチュラルチーズ

を一口大に丸め、刻んだナッツやレーズンをまぶして串に団子のように刺した料理と言うか菓子である。生イチジクの叩いたのをつけて食べることもある。

「言われてみれば、そんなのもあったわね。でも、あれも甘いじゃない。」

「リキュールの代わりにワインを使って、チーズにはブルーチーズとチェダーを採用して、レーズンを使わずにナッツだけをまぶせばいいんですよ。」

「それ、いただき！」

聞くなり、アントワネットさんはスタスタとエヴェレット氏のお宅を後にした。今聞いたことを自分の家に帰ってメモするために。

「あの……救急車……。」

静かになった部屋の中に、エヴェレット氏の囁くような声が吸い込まれていった。

「697便、聞こえてる？」

管制塔のど真ん中、メイン管制官席でマードックが聞

いかけた。

『はい、聞こえています。』

律儀に返事をするキンケイド。横では、スットコドッコイがOKサインを出している。

「そろそろ着陸やっちゃおうかと思うんだけど、どうよ？」

『は、はいOKです。OKマーク出ます。』

「OKマーク？……大丈夫かな、この人。さっきから、ちよいちよい変なことを口走ってますよ。」

管制官の一人が首を傾げた。

「心配ないって。この非日常的な状況でおかしくならない方が変人。あとは大人の事情ってやつよ。」

管制官の疑問を軽くないすと、マードックはマイクに向き直った。

「じゃあ、誘導するから、言った通りにやってねー。」

『は、はいっ。』

「あ、それから。」

と、後ろを振り返るマードック。

「フェイスに言って、ロビーの客とか野次馬、念のため避難させて。飛行機突っ込むかもしれないから。」

マードックの言葉に、ハンニバルのところから戻ったばかりのミス・ハナコ・ヤマダがくると踵を返し、水晶をゆらゆらさせながら去っていった。この女、懐いてしまえば案外使いやすいかもしれん。

一方、機内では。

「着陸ですって。」

「そうだね。」

「私はどうしていれば？」

「ええと、ちゃんとみんなシートベルトしてるかどうか客席を見てきて。で、終わったら横で待機。あ、その前に、管制官にこれから降りるって言うって聞いてね。」

「了解。」

と、マイクのスイッチを入れるキンケイド。

「ええと、管制塔、聞こえますか？ こちら697便です。」

『聞こえてるよー。』

緊迫した状況なのに、相変わらず脳天気なマードックの声。

「ええと、これから降ります。……ので、誘導お願いします。」

『OK。』

返事を確認すると、スットコドッコイは満足げにマイクのスイッチを切った。

「じゃ、あとはこつちで何とかするから、君は客席を見てきてよ。シートベルトしてない客がいたら、思い切つてギュッと締めてきて。」

「客にシートベルトですね。あの甘党の大男にも？」

「……いや、あれはいいや。多少の衝撃があった方が頭のネジが締まるかもしれないし。」

「わかりました、行ってきます。」

キンケイドは、キビキビと客室に去っていった。

「さて、と。」

コンソールに向き合うストコドッコイ。

「そろそろ降りますかね、ヴォルフとスタングも待つて  
ることだし。」

スピーカーから聞こえているマードックの言葉を軽く聞き流しながら、ストコドッコイは、操縦桿をゆくりと前に倒した。

その頃、ロビーでは、フェイスマンが追い詰められていた。

マスコミに包囲されたまま、キムの魔の手から逃れるためにひたすら後ずさっていたフェイスマンは、今や国内便のチェックイン・カウンターの奥まで追い詰められ、もうこれ以上下がる隙間はない状態。なのに、キムはとうとうフェイスマンを見つけてしまったらしく（自ら「テンピーには内緒で」と言っていたのは覚えてない）、鬼の形相で直進してくる。絶体絶命の大ピンチ。

と、その時、フェイスマンの肩を叩く者あり。

「何??」

振り返ったフェイスマンの目に映ったのは、ミス・ハナコ・ヤマダ。相変わらず感情の見えにくい東洋人スマイルでフェイスマンを見つめている。

「君か。今度は何? 今、取り込み中なんだけど。」

「ごめんなさい。じゃ、簡潔に言うわね。管制塔からの伝言。もうすぐロビーに飛行機が突っ込むから、みんな逃げて、って。以上。」

そう言うと、ミス・ハナコ・ヤマダは颯爽と去っていった。水晶を揺らしながら。

「ああ、ありがとう。飛行機が突っ込むのね……何だった! 飛行機が突っ込むって?」

叫ぶフェイスマン。そのフェイスマンの叫びを聞いてマスコミがどよめいた。

「おい、突っ込むって、どういうことだよ!」

「ハイジャックされた飛行機がここに突っ込むってことじゃないか?」

「犯人はテロリストか!」

「と、とにかく逃げろ!」

あつと言う間に解体されるフェイスマン包囲網。マスコミも野次馬も、揃って出口に向かって脱鬼のごとく逃

げ去ろうとしている。

「ふう、助かった。って、助かってないじゃん、俺も逃げなきゃ!」

フェイスマンは、そう言うと、足早に出口に向かった。しかし、そこに立ちはだかる一人の女。

「もう逃がさないわよ!」

キムは、そう叫ぶと、両手両足を大の字に広げて立ち塞がった。そのあまりの迫力に、マスコミの皆さんも怯む。

「キム、ごめん、今、俺、忙しくて……。」

「あなたの事情なんか知ったこっちゃないの! こっちは手が足りないんだから! そうだわ、ついでにあなたたちも手伝いなさい!」

そうやってキムは、横を擦り抜けて逃げようとするカメラメン二名の両手をガッシと掴んだ。

「こうなったら、だあゝれも逃がしませんからね!」

キムの肩越しに広がる空には、ゆっくりと697便の機影が近づいていた。

「脚出してー。うん、よしよし。じゃフラップをもうちょい下げてみて。そうそう、そ、その感じ。スラストで出力絞ってー。いいよ、いいよ。もうちょい右かな、うん、そう。ゆっくり操縦桿下げてー。吸って吸って吐いてー、ヒッヒッ、ヒッヒッ。」

窓の外を見つめ、マードックが写真家か産婦人科医か区別のつかないことを口走る。旋回を終えた697便は、なかなかナイスな角度で降下してきた。

「はい、そこで操縦桿をグッと押して、はいそう、で今度はー、はい引く! 出力落として。で……はい逆噴射! 操縦桿ちょい押して、もつと逆噴射! ガンガン逆噴射!」

コクピットではストコドッコイが操縦桿や各種レバーと格闘しまくっている。逆噴射のレバーを最大出力

にしているのに、重い機体だけあって利きが悪い。速度がなかなか落ちてくれない。自動ブレーキも、思っていたより利いちゃくれない。ブレーキレバーをマックスにし、ブレーキペダルを思い切り踏み込んでも、機体は慣性によって前へ前へと進んでいく。ストコドッコイの

こめかみに、ツツツと汗が伝った。

そして客席では、数分前に、キンケイドとガウデンシオとワゴンが後部に吹っ飛ばされ済みであった。

「ぎゃあーっ!」

ロビーに叫び声が響いた。キム以外の、そこにいる全員による大合唱。だって、すぐ目の前にはジェット機の鼻先がゴゴゴゴと迫りつつあるのだから。

「全く、一体何なのよ?」

苛ついたようにキムは後ろを振り返った。その途端、彼女の眉間に深い皺が寄る。

「何なのよ、これはーっ?!」

【つつく】